

# キリスト・創造主

油井義昭

私達日本人キリスト者のキリスト教理解、神観念、それにイエス・キリスト像は余りにも小さくなっているのではないだろうか。それは日本人の信仰の重点が、創造論を抜きにした救済論的片寄りの方向にあり、又、内面的、内省的傾向にあるからではなからうか。日本人の信仰は、キリスト信徒のなぐさめ、救い主イエス・キリストを中心として始まり、自己の内面的かかわりとしての神という面が強くなる。しかし、一方では神が身近ではあるが何とも弱々しい神のような印象を与えることも事実である。私達は日本人としての自分の感慨や気持ちを書きの中に読み込んで、いつのまにか、弱々しい神を作り上げるという誤りを犯してはいまいか。内面的救済を強調する日本人の信仰のとらえ方の理由の一つは、日本人のキリスト教信仰が創造論的基盤に根づいていないことである。創造論的視点に立つということがキリスト教信仰の理解にとって重大なことであるが、私達はそのことをどの程度理解していることであらうか。

結局、今日においても、キリスト教の最大の問題は、「あなたはキリストを何と思うか」の一事につきる。<sup>①</sup>「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」というキリストの質問は私達に対してもなされているのではないか。イ

エスをどう見るかということが、私達のキリスト教信仰理解への大切な布石である。世界の創造者・支配者としてのキリストの超越性が明確になっていなければ、人生と、世界の全体をキリストとの関係で位置づけるというキリスト教信仰の全体構造をうちたてることはできない。

この小論において、聖書は創造について何を語り、特に創造主・キリストについてどのように語っているかに注目して、いくつかの点を探っていこうと思う。私がどう思うかというより、聖書が何を言っているかに焦点を当てたいと思う。

### (1) 聖書の中の創造の教理の卓越性

聖書に接して驚くべきことの一つは、聖書ははじめから終りまで創造というテーマで貫かれているということである。創世記は聖書の始めであり、宇宙の始めを記録している。それに続く啓示は、創世記が記録するような宇宙と生命と人間の起源の知識を前提としている。旧約では何度も神は、天と地の創造者であること、又、そのようなお方として礼拝されている。人々は神が自分の祈りにこたえることができる都十分確信して祈っている。創造は詩篇の主なテーマの一つである。創造は預言者達がイスラエルを、そのひどい偶像崇拜と天体の迷信的礼拝を譴責（けんせき）する時、預言者達の唇にしばしばのぼった真理であった。

新約聖書において四福音書の最も深遠で最も神学的な書、ヨハネの福音書は、神のこの創造のみわざの再確認をもって始まっている。使徒パウロは壮重なローマ人への手紙を、彼らの神についての無知は、弁解の余地がないことを示すことから始めている。何故なら彼らをとるかこむ創造された宇宙は、神の目に見えない本性についての啓示として十分であるからであった。パウロは、何度も手紙の中で、世界が成り立つ御方としてキリストを高揚する。へブル人への手紙の著者も同じく、その巨大なキリスト論的資料のそもそものはじめに創造の真理をおいている。

私達が自分の魂を信頼してまかせることが出来る御方として使徒パウロが示すのは、真実な創造者である。黙示録は、天使達と贖われた被造物の全軍が、天と地を造られたお方への賛美に合流している。<sup>②</sup>

## (2) 創世記一章・二章と創造神

創世記一章は、宇宙がいかに始まったかという原始的な記録ではなくて、誰が万物を存在させたかについての記録である。創世記一、二章は創造についての、あるいは宇宙発生についての神話的説明ではないので、神話と同列に置かれるべきではない。ある者は創世記一・二の *tehom* (淵) という語が、バビロニアの創造物語 エヌマ・エリシュの *Tiamat* (ティアマト) から発生したと考えた。しかしながら、そのように考える確実な証拠はない。

創世記一章二章の目的とバビロニア創造神話の目的とは全く異なる。キツチンは言う。

「創世記は唯一の神を至高なる創造者として描くことを目指しているが、他方、エヌマ・エリシュの本来の目的は、バビロニアのパンテオンの主神と彼の町とがいかにして主権を勝ち取ったかを、宇宙論的な用語で語ることによってその神をほめたたえることである」<sup>③</sup>。

さらに、人は、創世記記事の単純さとその唯一神教はメソポタミア神話叙事詩の入念さとその多神教からの借り物であり、浄化、単純化であると言う。しかしその考えは方法論的に誤っている。「古代オリエントでは、単純な記事とか伝承が(増大や補飾によつて)手の込んだ伝説となることがあつても、その逆ではないという習慣である。古代オリエントでは、創世記の初めの部分に仮定されて来たように、諸伝説が単純化されたり(歴史化された)擬歴史に変えられたわけではないのである」<sup>④</sup>。

さらに言語学的に *tehom* は、バビロニア語の *Tiamat* という語からは派生し得ない。*Tiamat* という語自身が派生形である。一方紀元前二千年初期からの西方セム語のウガリト語は、「大洋、大いなる水」という意味の

tehom という聖書の語に匹敵する tmn を提供する。tehom は Tiamat から派生するはずがない。何故なら tehom には h がある。この h はヘブル語とウガリト語に共通の資料からの派生であることを示す。それで言語学的根拠にのつて、創世記の記録は、バビロニアからの借用や派生であるとは十分に示されない。それで、創世記一章二章について、文字通り以外の解釈はナンセンスであると結論できよう。唯一神の命令による創造という伝統的解釈の方が筋が通る。この立場をとれば、創世記一章は事実であり、実際の歴史であり、唯一の人格的神の行為によるものであり、特殊な形がモーセに与えられ、もともと、アダムに同じような形で宣言されたことになる。逆にエヌマ・エリシユの諸事実はアダムへの啓示からの派生で、エヌマ・エリシユはある程度、聖書記録を反映する。何故なら、類似の程度においてエヌマ・エリシユはもともとの事実我真であるからである。<sup>5)</sup>

創世記一章二章は創造における主役として創造神を前面に押し出している。「創造する」という動詞がこの神がされたことを描写するために色々と用いられている。神は「作る」(asah 創一・七、三二、二一・四。神は「形造る」(yatsar 創一・七、八、十九、エレ一・五、ホセ四・十三)。しかし bara 「創造する」という語が神の創造について独特に用いられている(創一・一、二一、二七、二・三、四)。bara は、人間の活動には使われず、神の活動にのみ使われているということは注目に値する。ローマ四・十七で神は、「無いものを有るもののようにお呼びになる方」と言い、ヘブル十一・三は、「見えるものが目に見えるものからできたのではないこと」を宣言し、無からの創造の教理を明らかに宣言している。聖書全体の視点より bara は無からの創造を示す。その絶対的特色を強調するため興味深くも bara はイザヤ書で十四回用いられている。実際にイザヤは、神の救いの計画の文脈の中で創造について語る。同じくエレミヤも主を贖い主と創造者として崇める。

学者達は、創造者としての神観念を旧約聖書の後期のモチーフと見る傾向があった。それにも拘らず、「主」の礼拝は、遠い古代に溯ることが出来る。創四・二六は、「セツにもまた男の子が生まれた……そのとき、人々は主の御

名によつて祈ることを始めた」と述べる。出エジプト記はイスラエルの全会衆とイスラエル史の中樞をなす啓示を、燃ゆる棘にいて神の御名の啓示を願うモーセに与える。出三・十四で、神はモーセに仰せられた「わたしは『わたしはある』という者である」。これはヘブル語の単語 *אֲנִי* (ハヤー) (である) の語根と密接に関係している。これは同語反復ではない。というのは「わたしはある」は、創造者のアイデンティティを表わす。一方、「ある」はその方(かた)の存在を表わす。つまり、神は「存在者」であると主張する。神は御自身について永遠に有効な主、創造者として啓示される。さらに *אֵל* 動詞の意味は「私は……である」と「私は……でしょう」の二つである。それで出三・十四においての主 (Yahw) の御名は、現在と未来に対する神の無条件の存在と主権を表わしている。

旧約聖書は、歴史の主、民の贖い主としてイスラエルと契約を誓われた神は、そうすることに確かで堅固な証しを持つていてと宣言する。というのは、彼は創造者で、彼の契約は、既に創造における彼の継続的忠実さの上に基礎づけられているからである。創造者の御名は「私は存在するようになるものをひき起こす」というものである。それは全ての物、全ての時間を含む。預言者達は、自分の言葉を、主は「万軍の主」であること、つまり、創造の全能にして逆らえない王であるという大きな確信の上に根拠づけた。アモスは言った。「山々を造り、風を造り出す方。その名は万軍の神、主(四・十三)、「すばる座やオリオン座を造り、暗黒を朝に変え、その名は主(五・八)。万軍の主、神はエジプトの力強い文明に必須のナイル川のわき上がりりと沈むことを支配する方である(九・五)。「海の水」を支配するように(五・八)、万物の主という称号は、多くの預言的発言の神学的根拠となった。イザヤ書で五十九回、エレミヤ書七十六回、マラキ書二十四回、ゼカリヤ書五十二回、エゼキエルは、別の句「私は主である」を七十回繰り返す。これは創造において忠実な神は、神の民との契約においても忠実であるということとを格別に強調するものである。<sup>⑦</sup>

創世記二・四の「神である主」とは、創世記一章の創造神こそイスラエルの民と契約を結んで下さり、イスラエ

ルの民を導いて下さる主であるという意味である。契約の土台として創造がある。そして神である主としてのイスラエルの信仰は、新約聖書においては、「イエスは主である」(一コリ十二・三)「私たちの主イエス・キリスト」(ロマ一・四)となり、旧約の神である主、創造者にして贖罪者で契約神であるお方こそ神の御子イエス・キリストであることを力強く宣言するのである。新約聖書において旧約聖書の主は新約聖書のイエス・キリストと同一視されている(例ロマ十・十三)。創造において忠実な神は、神の民との契約においても忠実であるという事は旧約、新約に拘らず普遍的真理である。このことの意味あいは、神に、その生活の日々を頼る者のみが、呼吸する息を、神が与え、神が支えて下さると悟る者のみが、神を自分の創造者とふさわしく呼ぶことが出来る。キリスト者は、もし神が創造者でなければ、贖い主になることが出来ないことを、十分に見ることに失敗してはならない。もしもそのような見ることが出来るなら、贖いを創造論的に、創造を贖罪論的に見ることもできよう。さて、これから創造主キリストが旧約聖書においてどのように現われ、新約聖書においてどのような意味づけがなされているかを見ることにしよう。

### (3) 神のことばとしての創造主キリスト

新約聖書は創世記における創造者はキリストであることを宣言する。ヘブル人への手紙の著者は、キリストを神が空間と時間の世界を存在させた永遠の御子として提示する。また、御子の能力あるみことばによって宇宙は瞬間瞬間支えられている事を提示する。創造は「神のみことばによって」であった。聖書は、世界は神のみことばによって造られたと教える。創世記の創造の記録は、宇宙の種々の部分が、神の単なる命令によって存在するようになった事を提示する。「神が『光よ。あれ』と仰せられた。すると光ができた」という訳(わけ)である。新約聖書の考えはどこから来たのだろうか。それは旧約聖書である。新約聖書は旧約聖書を前提としている。創世記一章は繰

返し、「神は仰せられた」―そして、神が仰せられた事は、直ちに事実に変形された。神は人を御自身のかたちに創造された。男と女とに彼らを創造された(創一・二三、二六、二七)。もし事物が、神が「言われた」ことの故に創造されたのなら、事物は神の「ことば」によって造られたのである。そのことについて詩篇は次のように述べる。詩三三・六、九「主のことばによつて、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによつて」。同じく詩篇は創造者について宣言する。詩一四七・四「主は星の数を数え、そのすべてに名をつける」。十八節「主が、みことばを送つて、これを溶かし、ご自分の風を吹かせると、水は流れる」。詩一四八・五「主が命じて、彼らが造られた」。イザヤは同じ感慨を表わしている。イザヤ四〇・二六「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもつて呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれることはない」。イザヤ四八・十三「まことに、わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を引き延ばした。わたしがそれらに呼びかけると、それらはこぞつて立ち上がる」。何故、神のことばは、万物をうみ出すのであろうか。それは神のみことばが、常にその特殊な性格にふさわしいみ力を持ち、特定の目的のために有効であるからである。イザヤ五五・十一「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰つては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送つた事を成功させる」<sup>⑨</sup>。

へブル人への手紙の著者は、神が究極的に語られたキリストについて、「その力あるみことばによつて万物を保つておられる。」(へブ一・二三)と語る。同じくペテロはこのことを否定する人達について次のように警告する。

「こう言い張る彼らは、次のことを見落としています。すなわち、天は古い昔からあり、地は神のことばによつて(εἶπε τὸν θεὸν λόγῳ) 水から出て、水によつて成つたのであつて、当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによつて(εἶπε αὐτὸν λόγῳ) 火に焼かれるためにとつておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで保たれているのです」(Ⅱペテ二・五―七)。生命を与える創造のみ

ことばを拒絶することは、混沌と審判をもたらすばかりである。今、活動的な神のみことばを否定することは、今でも活動的に万物を保持している創造者への信仰の中枢を切ってしまうことである。というのは「人はパンだけで生きるのではない。人は主の口から出るすべてのもので生きる（申八・三）からである。人の自然的存在は、全的に神のみことばに依存している。これは人が知り得る最も深いリアリティである。こうして、聖書の創造と神のことばとの関係についての真理を見出すことは、全く一慣性がある。つまり、「信仰によつて、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです」（ヘブ十一・二三）。

さて、ひとたびイエスが神のみことばとして認められるなら、その時、みことばの活動に帰せられるものは何でも真実にイエスに帰すことが出来ると言えよう。神のみことばとして、イエスは、人間性に受肉なさる前に存在されたのである。ヘブル人への手紙の著者は、神が人類への最終のことばを語られた御子としてイエスを提示する。「神は御子を万物の相続者とし、また御子によつて世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによつて万物を保つておられます」（ヘブ一・二一―二三）。さらにヨハネ五・十七で、イエスは「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです」と言われる。これはつまり、御父は、創造の時、働きをおやめにならなかつたということ、御父は御自分が創造されたものを保持することによつて働き続けたと言ふことである。そしてもし御子が創造の働きで御父の代理者であつたら、御子は信者の働きでの御父の代理者としても残るといふことである。<sup>⑩</sup>

ヨハネは紀元一世紀の終りに福音書を書いて、女より生まれた真の人イエス・キリストは「このことば」の受肉、つまり、「はじめに」存在した神の自己啓示であると宣言して、福音書を書き始めた。もしも、このことを理解するならば、福音書の中で説明するのに困難であろうところの、イエスの奉仕の中にある多くの特色を讀者は理解するで



あろうとヨハネが言うのである。「ことば」という用語は、ヨハネが言わんとすることを正当に伝えるのに十分ではない。しかしより適切な他の語がない。この意味での「ことば」は、神の発言や自己表現以上のものである。ことばは神の代理者である。旧約聖書において、ことばは神が創造する時に語られたものであり、神の力が働いて、神の目的が成就された。旧約聖書は、神のことば、すなわち、神の目的を実際に表明したものは、その目的を実現する力がそれ自体の中にあると述べる。神が「…あれ」と仰せられた。「すると……ができた」(創一・三)。このように、神のことばは神のわざを行なう。

ヨハネは旧約のこの考えを取り上げ、さらに神のことばについて語る。(a)「初めに、ことばがあった」(一・一)という表現には、ことばの永遠性が示されている。ことばは共同創造者として万物の出現以前に既に存在しておられたのである。(b)「ことばは神とともにあった」(一・一)とは、ことばの人格性を示している。神の目的を成就する力は、特異な人格的存在の力で、この方は、神との交わりという永遠の関係を持っている。(c)「ことばは神であった」(一・一)はことばの神性を示す。この方は御父と異なる人格的存在でありつつ、被造物ではない。この方は御父と同様に、御自身で神性を持っている。この節は神の唯一性の中に、人格の区別があることを示している。(d)「すべてのものは、この方によって造られた」(一・三)は、ことばの創造のわざを示している。この方は父なる神の創造のわざにおいて、父なる神の代理者であった。ことばが神の人格的代理者として見られるので、「それ」よりも「この方」と適切に呼ばれる。キリストは創造者であることがここに宣言されている。(e)「この方にいのちがあった」(一・四)とは、ことばにいのちがあることを示す。被造物には、キリストにあつて、また、彼を通してでなければ肉体的いのちがない。いのちはことばによって与えられ、維持される。被造物は、それ自体ではいのちがない。神の第二位格であることばによって、いのちを持っているのである。(f)「このいのちは人の光であった」(一・四)はことばが啓示者であることを示す。この方はいのちを与えるだけでなく、光をも与える。(g)「ことばは人

となつて」(一・十四)とは、ことばが受肉したことを示している。ベツレヘムの飼葉おけの中の幼子は、永遠の神のことばに他ならなかつたのである。さて、ヨハネはこのことばが、神としての人格であり、あらゆるものの創始者であることを示した後に、このことばが誰であるかを示す。このことばは受肉したことによつて神の子であることを示された。「私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である」(一・十四)。ことばが誰であるかは、十八節によつて確認される。「父のふところにおられるひとり子の神」である。ヨハネはイエスを神の子と呼ぶ事の意義を明らかにする。神の子は神のことばでもあるということである。<sup>⑭</sup>

#### (4) 神の知恵としての創造主キリスト

神のことばは創造主キリストであることを示したが、神の知恵はどうであろうか。詩篇一〇四・二四は「主よ、あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもつて造つておられます」と述べる。箴言三・十九は「主は知恵をもつて地の基を定め、英知をもつて天を堅く立てられた」と述べる。

しかし、時々、神の知恵は、擬人化され、第一人称単数で語る。ヘブル語の知恵は、女性名詞であるので、旧約の擬人化された知恵は、女性で、全能者の長女である。これが、知恵がしばしば引用される箇所(箴言八・二二―三二)でとらされている役割である。そこで知恵は「大地の始まりから」神のかたわらにすることを喜んだと主張し、神が世界を創造された時、これを組み立てる者として神と共にあつたと主張する。これは知恵の強力で顕著な擬人化である。知恵は結局神的属性のまま残り、神が被造物世界の関係を仲保するのを助けている。<sup>⑮</sup> さらに、戯れる創造者(箴言八・三〇―三一)は人と動物を戯れの促しをもつて作る(詩一〇四・二六、イザ十一・八、ゼカ八・五は箴言八と同じ動詞である)<sup>⑯</sup>が、これは知恵が喜びの源泉であることを示している。

「主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた」(二二節)。ここでは主という

強調のことで始まる。ここには素晴らしい芸術的手腕を与えられている知恵の主な信用状がある。第一に、知恵は、創造者としての主が、主なもの、必須のものと数えたものである。第二に、知恵は、宇宙よりも古く、宇宙に対して基本的なものである。物質のちりも(二六節)、秩序の跡も知恵によらないで存在しなかった。第三に、知恵は喜びの泉である。というのは喜びは、創造者の知恵が行使される時は何時でも(三〇節)、何処でも(三一節)あふれ出るからである。<sup>15)</sup>箴言八章の知恵の隠喩ははじめ人格化され、絶対になり、神格化された。

さて、この神の知恵の創造的役割から離れて、キリストは新約聖書で「神の知恵」と呼ばれる。「キリストは私たちにとつて神の知恵となり」(エペソ一・三〇)。これは、キリストが御自身の權威に基づいているものであるかも知れない。というのはキリストが、神の知恵として認識しつづ話されたからである。キリストの発言のあるものは、「知恵のことば」と区分された。しかし、キリストが神の知恵と呼ばれる時、それは、私達が旧約で見えるような単なる擬人化ではない。擬人化は比喩的表現である。しかし、キリストが神の知恵と呼ばれる時、意味されることは、この真実の人は、神の知恵の権化であるということである。神的知恵は、公的奉仕の間、みわざとみことばの全てに現わされた。そして顯著に十字架刑に現わされた(普通の人間的知恵の標準によつては、そのような主張は途方もないように見えるだろうが)。

ひとたびキリストが神の人格的知恵に相違ないと確認されるや否や、旧約聖書における擬人化された知恵の諸活動は、当然キリストに帰せられたのである。箴言八・二二の冒頭のことば「主は……そのみわざの初めから、わたしを得ておられた」という主張は、恐らくコロサイ一・十八の「御子は初めであり」という声明の下に横たわっている。同じ主張が黙示録三・十四の下にある。そこではよみがえりのキリストが、ラオデキヤの教会に宛てて「アーメンである方、忠実で真実な証人、神に造られたものの根源である方」と自己紹介している。それで、キリストは「初め」である。しかし、初めということは現われる旧約のもう一つの創造の箇所、創世記一・一は「初めに、

神が天と地を創造した」という声明と共に始まっている。さて、もしキリストが「初め」であるなら、キリストにあつてこそ、天と地は創造されたと言ふことが出来よう。これが、まさしくコロサイ一・十六が言わんとしていることである。「万物は御子によって造られたのです」。

しかし、もしこれが初代のキリスト者達が推理したやり方であつたのなら、それは決して空しい推論ではない。ナザレのイエスにおいて人となられた永遠の知恵は、神が世界を存在させた知恵であつた。初めに、創造的で、自己を啓示することばを語られた神は、今やキリストを通して新しい創造を始めるために（Ⅱコリ五・十七）、イエス・キリストにおいて御自身を啓示されたのである。キリストが古い創造におけるの代理者であると言われる時、その目的は新創造における彼のみわざのための裏生地として役立たせることである。イエスは賢者のテクニクを用いられた（例えば福音書にある約十六の知恵のたとえ話の技法）ばかりか、御自分を知恵そのものであると主張された。確かに、イエスの知恵は、その行ないによって正当化された（マタ十一・十九）。イエスは、後に同じ個所で、御自身にとつて独特な御父の御心と道について、また、御自分がそれを現わそうとされる人々についての理解の深さを持つていと主張される。「ここにソロモンよりもまさつた者がいる」（マタ十二・四二）。キリストの知恵は新創造におけるわざのためである。「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです」（Ⅱコリ四・六）<sup>⑩</sup>。

##### (5) 再創造者キリスト

新約聖書は顯著にキリストが古い創造の共同創造者であるばかりか、新創造の代理者であることを示している。その意味において被造物、特に人類の贖いということに強調点がおかれている。

エペソ人への手紙の中でパウロは、キリスト者に、「あなた方は、世界の基の置かれる前から選ばれたもの」と言

い、さらに次のように述べる。「神は、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになつたご計画によることであつて、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いつさいのものが、キリストにあつて一つに集められることなのです」(エペー・四、九―一〇)。キリストにある創造の目的はヨハネの福音書の序言の中で次のように述べられる。第一に、ことばは、人間の理解を超越する創造の原的意志と目的を啓示するといふことである。それは父なる神は、世界を創造し(起源において)愛する(継続において)ために、聖霊によつて、御子なる神(ことば)において現わされたということである。第二に、ことばは人と創造者の間の特別な關係を示す。人はことばに反応することが可能である。何故なら、ことばが肉体をとられた、創造者が被造物としての存在の有限性に入られた、キリストが人となられたからである。ことばへのキリスト者の信仰は、哲学ではなくて、キリストにあつての神と人との人格的關係であり、それはその名を信じた人々に与えられるのである。第三に、ことばは新契約の現われとして贖罪的である。<sup>⑩</sup>

奇跡はイエスの奉仕の顕著な特色である。イエスの奇跡は、古い創造ばかりか新創造におけるキリストの力を明らかに示す。福音書の奇跡は、普通、力とかしるしと呼ばれる。それはつまり、イエスの奇跡が不思議なことをする人のものでなくて、彼の共同創造者としての性格の証拠である。イエスの奇跡はその性質によつて二つに分けられる。一つはいやし、食物の供給、審判における破壊などで、創造者の摂理として、創造の内にあつて矛盾がなく、「古い創造の奇跡」(C・S・ルイス)と呼ばれる。<sup>⑪</sup> もう一つは「新創造の奇跡」と呼ばれる。キリストは贖いにおいて新創造を始めるために来られた。そしてキリストはラザロの復活と御自身の復活の出現のような他の奇跡を「新創造」と見て、その奉仕をこの性格に属すものと見ている。

創造の目的としてのイエス・キリストは、神が意味していることの啓示である。(a) 第一に、神のかたちとしてイ

エス・キリストは、創造と新創造において、神の目的の鏡である。人は神のかたちに造られたが墮ちてしまった。しかし、「御子は、目に見えない神のかたち」(コロ一・十五)として創造者の目的の王的極印をあらわし、被造物世界において神の摂理的支配を維持なさる。キリストは神の反映である。神が創造のために意図されたことを私達は、宇宙的墮落の故に、十分に知らない。しかし、私達は人に対する創造者の意図に関して啓蒙されている。人の回復のために、すべての被造物が産みの苦しみを待っているのは、人類が息子として子とせられることである(ロマ八・二三)。(b) 第二に、キリストは人類に人が創造者の前に持つべきような関係を示すために人として来られた。キリストだけが神の本質のかたちをおび給う。しかし新しいアダムにあつて、私達は道徳のかたちをおびる。「なぜなら神は、あらかじめ知っておられる人々を御子の姿に似た者にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多く兄弟たちの中で長子となられるためです」(ロマ八・二九)。「私たちは土で造られた者のかたちを持つていたように、天上のかたちをも持つのです」(Iコリ十五・四九)。従つて、新しい人は古い秩序を脱がねばならない。「新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ真の知識に至るのです」(コロ三・一〇)。(c) 第二に創造者は人の子として人に深くかかわる。創造者は、人間の間にあつて、人間の生命を再創造し、かつ更新し続けられる。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、驚のように翼をかつて上ることが出来る。走つてもたゆまず、歩いても疲れない」(イザ四〇・三一)。世界創造の能力はまた、気力の衰えた者の霊を新たにする能力である。天地を創造し、その中に住む者に生命を与えなさる主は一人の僕を選び、これに盲目の目を開かせ、捕われし者を獄より解放なさしめ、異邦人の光となさしめて創造の業を継続なさるのである(イザ四一・五―七)。人の子として創造者は謙遜の中で匿名(とくめい)であつた。十字架の上で恥かしい死を受けられた御方は位に座する主(詩一一〇・一)である。このように、人の子の人間性にあつて創造者と被造物が関係づけられる。彼にあつて神と人との疎外と不釣合はない。彼にあつて創造者は苦しむ人間性の全てと一体化されている。人の子は働いてい

る創造者で、全てにおいて、被造物の苦痛、悩み、貧困、無力、空しさをわかつことによつて、彼が造つたものを再創造される。分ちあひ、苦しみ、仕えることによつて、うめき苦しむ被造物を新しくいやし、祝福するのである。<sup>20</sup>

#### (6) 宇宙の主なるイエス・キリスト

キリストの宇宙的、あるいはむしろ超宇宙的範囲はコロサイ一・十五―二〇に壮重に表現されている。被造物より先に生まれ、死者の中から最初に生まれた方についての二つの連にキリストの先在が再確認されている。創造において知恵として先在して、彼はまた、救い主として贖罪において先在し、新創造と同じく創造における初めである。

三つの前置詞によつて宇宙的キリストの性格が描写されている。十六節「御子によつて」(ἐν αὐτῷ), 「御子によつて」(ὁ ἐκ αὐτοῦ), 「御子のために」(ἐκ αὐτοῦ) 万物はつくられた。「彼にあつて」被造物はその起源をもち(神のことは、知恵として)、「御子によつて」被造物は統合され、その相互依頼において、被造物は彼によつて保持される。「彼のために」全ての被造物は存在し、キリストにそのクライマックスを持つ。創造、贖いそしてエスカトン(終り)はこのような方キリストにおいて要約されるのである。

この賛美の第二の連は、キリストが最初に生まれた方であることを繰り返す。このたびは創造の証人と代理者としてではなく、再創造の代理者としてである。もし人がイエス・キリスト抜きで創造を語ることができないなら、イエス・キリスト抜きで新創造を語ることはいかぬ。創造と贖いは孤立させることが出来ない。そしてキリストに贖われた者として教会は、宇宙の残りのものための神の目的からもはや孤立することが出来ない。さらに教会に起ることは、全宇宙のためである。というのは、キリストにあつて万物は成り立っているのである。<sup>21</sup> 墮罪の教理

には、人間の墮落と共に自然の墮落も含まれる。それゆえ、メシヤは宇宙の意味をもった存在でなくてはならない。全宇宙をその最初の状態に回復させることができ、人間の主であるばかりでなく、自然の主でもなければならぬ。従つてパウロは主がこの大規模な宇宙的働きを成就しつつあるのを悟っている（ロマ八・二三、一三三参照）。もしキリストが宇宙を創造されたのであれば、そしてそれを支えておられるのであれば、キリストはそれを回復することができないはずではなからうか。キリストは宇宙の主である。<sup>②</sup>

### 結語

このようにキリストは先在の状態にあられた時、創造のみわざに深く係わつていたのである。そして新創造の代理者としての業を行ないつつ、自然と人類を含む被造物を新たにする業を完成に導びこうとなさつていたのである。キリストは神の意志の表現であり、神のみ力の執行者である神のみことばであり、全世界を創造し、保持される。新約聖書は、創造の神は、贖いの神と同一であり、創造のことばは、キリストに受肉した贖罪のことばと同じであるという啓示において、この理解を深める。キリストは神のことば、知恵として世界を存在させた。しかし、今や、使徒達は自ら、受肉したことばを通して新創造、贖われた共同体、イエス・キリストの教会を存在せしめた神の力強いわざを証している。<sup>②</sup>そしてこの再創造者キリストは宇宙の、超宇宙の主としてほめたたえられているのである。私達も旧約から新約に流れる壮大なキリストについての信仰に力強く生きるものでありたい。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」（黙五・十三）。

### 〈注〉

① ジョン・ストット『信仰入門』（有賀寿訳、キリスト者学生会出版局、一九六四年）、三三三頁。



- ② Willbur M. Smith, Therefore Stand (Boston: W. A. Wilde Company, 1945), p. 277.
- ③ K・A・キッチン『古代オリエントと旧約聖書』(津村俊夫訳)いのちのことば社(一九六六年)一一七頁。
- ④ 前掲書 一一七～一一八頁。
- ⑤ Harold G. Stigers, A Commentary on Genesis (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1976), pp. 51-52.
- ⑥ Ibid., p. 49.
- ⑦ James M. Houston, I Believe in the Creator (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1980), pp. 47-48.
- ⑧ Ibid., p. 48.
- ⑨ J. Y. Cambell, "Word" in A Theological Word Book of the Bible (Alan Richardson, ed. New York: The MacMillan Company, 1950), p. 284.
- ⑩ Houston, I Believe in the Creator, pp. 50-51.
- ⑪ F. F. Bruce, The Work of Jesus (Eastbourne: Kingsway Publications, 1979), pp. 95-96.
- ⑫ J・ローレンスカー『神ごころ』(山口昇訳)いのちのことば社(一九七八年)八七～八九頁。
- ⑬ H. Wheeler Robinson, Inspiration and Revelation in the Old Testament(Oxford: The Clarendon Press, 1946), pp. 259-260.
- ⑭ Hans Bürki, "Monograph on Provocative Writing," Crux vol. 6/3 1968/69 (Toronto, Canada) p. 1.
- ⑮ Derek Kidner, Proverbs: An Introduction and Commentary (Chicago: Inter-Varsity Press, 1964),

p. 78.

- ⑩ F. F. Bruce, The Work of Jesus, pp. 97-99.
- ⑪ Houston, I Believe in the Creator, p. 131.
- ⑫ C. S. ルイス 『奇跡』(柳生直行訳、みくに書店、一九六五年)二二三〜二二九頁。
- ⑬ オットー・J・バアブ 『旧約聖書神学』(三善敏夫訳、ヨルダン社、一九四八年)六四頁。
- ⑭ Houston, I Believe in the Creator, pp. 136-142.
- ⑮ Ibid., p. 114.
- ⑯ レオン・モリス 『天よりの主イエス』(聖書図書刊行会、一九六四年)一四〇頁。
- ⑰ H. W. Robinson, p. 90.

[旧約学・講師]